

面接の思い出

校 長 武井 正明

面接ではホロ苦い思い出ばかりだ。

初めてやった面接は、私立の一般受験。これを落ちるともう後がなかった。

筆記試験はやたら難しかった記憶がある。

そして午後の面接。今では信じられないことだが、当時は中学校で一般受験の面接練習はなかった。だからぶっつけ本番、自分でなんとかしろってやつ。

面接の最後にやたらと「君、髪の毛が茶色いね。染めてんのかな？」と訊かれた。

「いいえ、地毛です」…終わった。はっきり滝の音が聞こえた。俺は今落とされたんだ、と思った。だが、拾ってもらった。因みに、公立で落ちたショックが大きく、自分で発表を見に行く勇気さえなかった。業を煮やして親父が見に行ってくれた。大学の時も、意味なく庭でバットを振っていた。これも待ちきれず、母親が自転車を漕いで見に行ってくれた。なりは大きいくせに臆病者、それを聞いた親友からは「自分で見に行けなかったのか、ダメだなあ」と呆れられた。今思えば、情けない限りである。

その後の人生、何度も面接を経験した。

面接の練習後、面接官役の人から厳しく叱責されたことがある。

「あなたは最初から最後まで、私の眼を一度も見なかった!!」…震えあがった。

だって怖かったんだもん。

面接室に入った瞬間、真っ黒な目が二つ、私の顔を凝視している。

一瞬で、ヘビに睨まれたカエル。大蛇の前のアマガエル。

それからは、面接が一刻も早く終わることだけを念じ、何を答えたかは全く憶えていない。ただ、質問の時間中、私はずっと謝り続けているような、歯茎に麻酔を打たれた時の、ぼんやりした感覚になった。因みにその面接官は、般若の面のような顔をした女性だった。その輪郭は、今でもくっきりと憶えている。忘れようがない。夢に出てきたこともある。今でも黒マジックで描けるはずだ。その背中からは、まるで熱い湯気がどこまでも高く立ち上っているようだった。

今思えば、情けない限りである。

だからその逆、温かく笑顔で包み込んでくれるような、優しい面接官は、だーいすき。

柔らかく、まるで受験者の成功と一緒に祈ってくれているように、ゆっくりと質問してくれる。そんな面接官、実はいるんですよ。こういう人に当たるとハッピーだ。不思議なくらい、自然な感じでうまく受け答えができるものである。そういう面接官の方って、これまでの人生で悔しい経験をいっぱいしてきてる人なんだろうな、きっと。

面接を受ける皆さん、頑張ってください。人生何事も経験だよ。